



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 8 号 令和4年 2月 2日  
発行人 会長 根本 秀一

## 「統合」を考える

東西しらかわ小学校長会副会長 鈴木 雅人  
(棚倉町立棚倉小学校長)

初めて孫と一緒に「初日の出」を見ました。元旦、私の住む地域では雪の朝でした。「今年は無理かな？」と思いきや、行く気満々の孫が起きてきたものですから、行かざるを得ない状況となり出かけた次第です。ところが、なんと奇跡的に初日の出が見えたのです。「結果が出るまで諦めるな。」孫から教わった新年の始まりでした。

そんな新年は、県南では東西の小教研が統合されたり、県では県立高校改革後期実施計画が策定されたりする年です。年の初め、孫の顔を見ながら、次世代の学校教育に避けて通れない「統合」について少し考えた正月でした。

今、「学校統合」問題は小なり大なり各地域で話題となっています。棚倉町においても「子どもの学びの在り方検討委員会」が発足し将来的な児童生徒の学びの在り方について議論しているところです。本校は令和3年度から棚倉町立山岡小学校と統合して、新生「棚倉小学校」となりました。とは言っても、学校名も変わらず、校舎も校歌も変わったわけではありません。ただ、気持ちは「新生」を忘れることなく経営に励んでいます。それがせめてもの山岡小学校への敬意の表し方だと思っています。

私の知る限りの小学校の統合の歴史は、昭和の時代に旧表郷村で小学校を一つにして表郷小学校としたこと。平成に入り鮫川村において、鮫川小

学校に青生野小学校以外が統合され、その後、鮫川小学校1校に統合されたこと。矢祭町においては、5校が統合し矢祭小学校としてスタートを切ったこと。埴町では、高城小学校・常豊小学校が埴小学校と統合したこと。そして今年度、棚倉小学校と山岡小学校の統合が行われたことです。さらには来年度、白河市大信地区3小学校が統合し、大信小学校が発足する予定です。このところの小学校の統合スピードは、早まるばかりです。

学校統合における教員としての経験は、統合後2代目の教頭として鮫川小学校に勤務し、埴小学校長として常豊小学校の受け入れを準備し、棚倉小学校長として実際に山岡小学校の子どもたちを受け入れたということです。統合前、統合後の環境整備の大変さはある程度分かっているつもりです。そして、一つの学校が無くなるとは、一つの学校文化が無くなるということで、その心の寂しさも少しは感じてきたつもりです。

「統合」は、「学校統合」のみならず、小学校長会においても経験済みです。統合前当時、統合についての意見を求められた時「県南は一つ。西も東も関係なく、オープンな土俵で子どもたちが切磋琢磨できることを望む。子どもたちのために、校長会が一つになるんだという意識を持つべきだ。消極的な統合ではない。」と発言したことを今でも覚えています。「若輩のお前に言われなくとも分かっている。」と言わずに、快く聞いて下さり統合までの道筋をつけてくださった諸先輩方の顔が今でも目に浮かびます。

そして、小学校長会統合5年目を迎える今年、もう一つの小学校の大組織小教研が東西一つになります。この統合も長年の諸先輩方の思いの上に立って行われるのです。

「統合」は、長い期間の大勢の方々の思いや努力によってなされます。だからこそ、組織維持のためだけではなく、「統合＝発展」という前向きさを忘れてはならないと思うのです。統合をきっかけとして、人材、場、内容がより確保され発展していくべきなのです。それが、統合することの意義であり、子どもたちのためなのです。統合とは、一つのことが終わるのではなく、新たなものを前向きに創り出すことだと思います。「諦めるな、統合の結果が出るまで。」

今年の初日の出の教訓を思い出した次第です。

## 避難地域の復興なくして福島復興なし

東西しらかわ小学校長会副会長 加藤 正行  
(白河市立白河第一小学校長)

「大熊町の役に立てようがんばります。」

成人式の後、テレビのインタビューに答えていた大熊町の青年の言葉です。東日本大震災当時、小学3年生だった児童が「ふるさとの役に立ちたい」という強い思いをもった若者に成長していることに、とても感動しました。

東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故から11年がたとうとしている今。避難地域12市町村で学ぶ小・中学生は、震災前のおよそ10%にとどまっています。私たちの学校にも、ふるさとが避難地域にある子どもたち、同僚の先生方がいる現実があり、厳しい状況が続いています。

このような中でも、大熊町のある双葉郡8町村全ての小・中学校では、震災からの復興を目指し、「自ら未来を切り拓く力とふるさとへの誇りをはぐくむ」ことをねらいとした探究的な学習活動を「ふるさと創造学」と名付け、実践を重ねています。すばらしい教育活動の継続に、陰ながら注目し、エールをおくっています。

震災当時、私は除染や放射線測定など自分の学校のことでも精一杯。避難を余儀なくされた方々に対して、何も行動を起こすことはできませんでした。何かできることがあったのではないかと、今でも悔やんでいます。

昨年3月、県小学校長会より東日本大震災記録集3部作を一体化させた「ふくしまの絆 総合版」が刊行されました。私たちは、ふるさとの再生に向けた学校再開の取組、子どもたちが困難に負けずに努力する姿を後世に伝え、教職員の強い意思と使命をもった取組を風化させないなど、本記録集が制作された意図をしっかりと理解することが必要だとあらためて思っています。

そして、放射線教育、防災教育を通して、震災の事実と最新の知識を子どもたちに伝え続け、未来に向けた取組と一緒に考えるとともに、自分の考えを表現し、行動できる力をはぐくんでいかなければなりません。県南の地にいても、世界中どこにいても、大熊の青年と同じ福島に生きるなかまとして、「ふくしまの絆」を繋いでいきたいと考えています。

## 草いろいろおのおの花の手柄かな

東西しらかわ小学校長会副会長 室井 博人  
(白河市立白河第三小学校長)

私は平成元年から六年間、白河第三小学校で勤務させていただきました。今回、また校長としてお世話になるとは夢にも思っていませんでした。

四月からの九ヶ月間、まさしく白三小の子ども達は相変わらずのパワフルさです。普通の学校の児童は大部分が教室ぐらいの大きさの枠に収まり、数人がはみ出す程度だと思います。でも白三小の児童は教室という枠にとどまらず、プールぐらいでも収まりきらない子が多いのです。そのため、普通考えられないような出来事も多々起こります。そんな中、白三小の先生方は児童一人一人をしっかりと見つめ、家庭との協力を図りながら、長いひもで引っ張ったり離したりしながら、しっかりと学級経営を行っていて、いつも感謝しています。

先日、校長室の資料の中に平成五年度のPTA新聞があり、当時の荒井学校長先生の文章を発見しました。

## 草いろいろおのおの花の手柄かな

これは芭蕉の句で、個性、特色というかそれぞれの持ち味のあることを言い得て、素晴らしいものだと思います。(中略) とりわけ教育界では、その人の良さ、素質を大切にしていける必要があり、その発見を引き出し、助長してやるのが大きな使命となっています。(中略) したがって、人づくりという仕事は、教師は言うに及ばず、家族の人たち、地域の人たちにも任されていますので、学校・家庭・地域の教育機能を再検討し～(後略)

白三小の児童はいろいろな個性の持ち主が多いですが、一人一人素晴らしい花を咲かせることができる素質をたくさん持っています。先生方の努力を無駄にせず、学校全体、さらには家庭や地域社会との連携を図る上で校長としての役割をさらにじっくりと考え、実行していかなければと改めて思い知らされています。白河第三小学校児童一人一人が自分の草をどんどん伸ばし、素晴らしい花を咲かせることができるように頑張ります。

## 残りわずかとなり

白河市立みさか小学校長 根本 秀一

この時期になり、考えたくなくても「あと何日」とか、「昔と比べると今は…」とか、なっけてしまいます。ずいぶん変わりましたよね。この40年。

振り返れば、教育界に身を置いてきた者として、学校教育が人づくりに果たす役割は大きいと思っています。かつて、サッカーワールドカップロシア大会で逆転負けしたにもかかわらず、日本人サポーターの皆さんが、スタジアムのゴミ拾いをしたことがありました。その時は、そういえば「来たときよりも美しく」と教えてきたなとか。東日本大震災で未曾有の災害を被ったにもかかわらず暴動や略奪が起きない日本が外国から称賛された時は、「思いやりの心で」「弱いものいじめはしない」などと指導してきたなとか。自分も含めそんな先生方の姿を思い浮かべたものです。

ところが、先日ラジオから「日本は人助けランキングで世界最下位」との言葉が耳に入ってきました。イギリスのランキングで先進国中最下位であり、日本人は本当に困っている人を助けられないのかについて書かれた著書の紹介でした。取り寄せて読んでみると、著書の中で田中世紀氏はこう分析しています。日本人はそもそも他人を信頼しない国民であり、一見親切に見える行動も実は相互監視と制裁の社会制度によるものであると。つまり、人に見られていなければやらないのではないかと。であればなおさら、先に紹介したゴミ拾いや略奪をしないという行為は、家庭や社会もさることながら、一日の三分の一を過ごす学校において、熱心な先生方に影響を受け、形作られてきたものなのではないかと思えます。

教育界を外から眺める時期がありました。外に身を置いて感じたのは、「先生は世間知らず」「バカ真面目」と言われますが、子どもと接する教員は、純粹でバカがつくくらい真面目で丁度いいということです。計算高かったり裏があったりする人間は、子どもと一緒にいてはいけなさと実感したのを思い出します。実に重要な職業です。

わが校がそうであるように、熱心に子どもたちに向き合う真面目な先生方は、子どもたちになくてはならない存在です。退いた後も、熱心で真面目な先生方を応援していきたいと思えます。

大変お世話になりました。

## 多くの出会いに感謝して

西郷村立米小学校長 小峰 光

昭和、平成、令和の3時代、35年に渡り教職に携わり駆け抜けてきました。11年前の東日本大震災は教頭職として経験し、避難所開設を始め、苦慮しながらも卒業式を挙行できたこと、震災後の学校正常化への道筋を立てたことが思い出として残っています。そして、校長としては、辞め際に発生した「新型コロナウイルス感染症」への対応、とても忘れ得ぬ経験をさせていただきました。

この間、様々な勤務地において、多くの教職員の皆様、地域の皆様、行政機関の皆様とご一緒させていただき、多くのことを学びながら、自分を成長させ、子どものための教育を進められる日々であったと感じております。中でも国立那須甲子青少年自然の家専門職員時代には、「社会教育」を学ばせていただきました。在任期間中、日独セミナーでドイツ21日間の社会教育研修もさせていただき、学校や子どもたちへの教育を別角度から見せていただき、社会教育を学ばせていただきました。後に学校現場に戻った際に、子どもの捉え方、社会教育と学校教育の融合を考えた教育を展開できたように思います。

さらに矢吹町教育委員会時代には、教育長様のご指導のもと、立場を与えていただき、議会対応、予算折衝などの行政や学校教育の推進のあり方を学ばせていただきました。また、多くの地域の皆様のご支援、ご協力をいただきながら、地域の宝である子どもたちの育成に携ることができました。

そして、校長職としての3校7年間においては、日々、自分を振り返り、子どもにとって最良の教育を進めることができているのか、保護者の皆様に教育活動の意図が伝わっているのかを、「学校だより」と「ホームページ」を活用しながら振り返り、一つでも価値ある教育、子どもの成長がある教育を進められるように心がけてきました。

今まで様々な壁を乗り越えさせていただけたのも、多くの皆様の支えが大きかったことを今改めて感じています。

皆様のご支援、ご協力に感謝しつつ、教職を終えたいと思えます。長い間、ありがとうございます。

## 「挑戦」と「感動」を子ども達と

矢吹町立中畑小学校長 二瓶 敦

本校全校生の今年度の大きな目標が50日間の全校児童全員登校日の達成でした。去る11月18日ついに待ち望んだ達成の日がやってきました。新型コロナの影響の中、様々な活動が中止や変更となる中、よくぞ達成してくれたと一人一人の児童の努力と保護者の皆様方への感謝の気持ちで一杯になりました。学校にさえ来ていただければ、勉強はできるし、運動もできるし、給食だって食べられる。友だちと遊ぶことだってできるし、これまでやったことのないことにもたくさん出会えるし、いいことだらけです。しかし、子ども達にとってはそんな夢のような場所が、ただ一言の嫌な言葉で「いじめ」となり「学校に行きたくない」という気持ちを生み出します。先生方一人一人のアンテナがピピピと働かどうかが鍵です。校長も日々高く広くアンテナを伸ばして情報を集め、分析し、自分にできることを地道に進めてきました。その結果がこの50日間達成だと思えます。

一つの挑戦が達成されたとき、子ども達の心に小さな自信が生まれます。同時に感動する心も育ちます。友だちとのコミュニケーションを苦手としているお子様が最近とみに増えてきています。不登校にさせないこと。登校することの大切さを、学級のみながそろっていることの大切さを一人一人が思う学校。そんな学校を願って一日一日進んで来ました。児童の皆さん今日もよく通って来てくれました。本当にありがとうございます。今日も学校でたくさん学んで過ごしましょうね。まだまだ中畑小の挑戦は続きます。

そして、もう一つの挑戦が「えとの森マラソン」という自主ランニングです。校庭1周200mを児童達が毎日走ります。ただし、1日に記録できるのは6周までです。これを積み重ねて100周になった児童に1枚の賞状が渡されます。表彰状を校長からもらうというご褒美に心を動かされたのか、1年生達も毎朝競って走ります。とうとう、12月には500周まで積み重ねる子どもが現れました。このランニングの良さは、児童達が自主的に進めている所と、友だち同士で競い合っていて楽しんで取り組んでいる所です。さて、3学期の気温は氷点下となりますが、挑戦はまだまだ続きます。

## 「気づき・考え・行動できる」感性を磨く

矢吹町立善郷小学校長 渡邊 郁夫

毎年、1学期の始業式に子どもたちの前で行っていることがあります。

「ここにハンカチが落ちています。あなたならどうしますか？」(実際にやってみる)

- ①ハンカチが落ちていないことに気づかない
- ②ハンカチが落ちていない。誰かが拾うだろう。
- ③ハンカチが落ちていない。誰が落としたのかな？みんなに聞いてみよう。

落ちていないことに気づかない心、目がないと①のようになってしまいます。気づいても、「まあいいか」「めんどくさいな」「自分のではないから」では②のようになってしまいます。分かっても深く考えたり、行動に移すことができない人です。「気づき 考え 行動できる人」は、もちろん③ですね。たかがハンカチではないかと考える人もいるかもしれません。しかし、目の前に落ちていないハンカチに気づけない人が、困っている人に気づいて声をかけたり、悩んでいる友だちの気持ちを理解したりすることができるのでしょうか。(演技しながら話すと、子どもたちは頷きながら聞いてくれました。同時に先生方や自分自身に対する確認や問いかけでもありました。このようにしてめざす児童の姿を子どもたちに、学校経営の方針を先生方に伝えてきました。)

私たち教師は決して心のにぶい人、心のアンテナのさびた人にはなつてはいけなと考えます。しかし、「気づき・考え・行動できる」感性というのは教えることや伝えることが、とても難しいものであると実感しています。子どもに寄り添い、子どもの視座で考え、子どもから学ぶことができる人には自然に備わってくるのではないかと考えるようになりました。(それでも伝わらない人も)

管理職になってからは、めざす教師の姿「志をもつ」「臨機応変の力」「持ち味を生かす」の実現のために先生方と共に学校づくりに努力してきましたつもりです。校長会の先生方からは学校づくりについて多くの事を学ばせていただきありがとうございました。

これからは学校という枠の外でじっくりと「感性」豊かに人・物・事に関わっていきたいと思います。

## 感謝

泉崎村立泉崎第一小学校長 大塚 克己  
大学生の頃に「環境が子どもの成長にどんな影響を及ぼすのか。」を追究する研究部に所属し、なるべく社会環境が複雑ではない東北・北海道地方の人口が少ない地域での現地調査を行いながら、環境と子どもの成長についての相関関係を見い出そうとしていました。

そんな私が、今度は、当事者として昭和・平成・令和と38年間に渡り、子ども達の最大の教育環境とも言える教育公務員として過ごしながら、環境と子ども達の成長について考え、ある程度理解を深める教員生活を送ることができたのかなと有難く感じています。「環境教育部」に導いてくださり、味わい深い社会生活を送るきっかけを持たせてくださった大学の先輩方、担当の先生方に感謝します。ありがとうございました。

昭和59年度より学級担任として子ども達から「先生!」と呼ばれるようになりました。喜怒哀楽を共にする教員としての生き甲斐や課題を与えてくださった子ども達。やんわりとした言い方で配慮を促し、未熟な私を教師として育てようとしてくださった保護者の方々。また、私に課題解決の方向や手立てを示してくださった先輩の先生方や同僚の先生方に感謝します。ありがとうございました。

平成・令和には校長として、4つの小学校にお世話になりました。それぞれの小学校にはそれぞれの歴史と伝統と特色がありました。そして、地域の皆様の今となつては当たり前ではない、より望ましい教育環境づくりのためのお力添えをいただきました。PTA役員の皆様、地域の皆様、小学校教育を支えてくださりありがとうございました。

小学校は、子ども達が学び育つ重要な教育環境の一つであると考えています。その場所で子ども達の学びを支えるために様々なお立場から学校教育活動を展開していただく職員の方々、特に、学校教育活動の扇の要として運営に全力で携わってくださっている教頭先生方、ありがとうございました。そして、課題を共有し解決の方向をご示唆くださいました東西しらかわ小学校長会の皆様、お世話になりました。ありがとうございました。

## 教育環境の充実のために

東西しらかわ小学校長会行財政部長 渡邊 康一  
(西郷村立熊倉小学校長)

今年度も新型コロナウイルス感染症により、各学校では感染症対策と児童の学びの両立を図ろうと、大変なご苦勞をされてきました。そのような中、校長先生方におかれましては、調査研究をはじめとした行財政部の取り組みに、ご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。

さて、5月には「教育財政に関する調査」として、教職員の配置等に関する調査、教育施策実施状況に関する調査、大震災・原発事故や感染症の影響に係る調査にご協力いただきありがとうございました。9月には、県全体の調査結果が集計され、調査結果とともに、調査項目ごとの分析・考察等が、県小学校長会のHPに掲載されました。この資料は、福島県の小学校教育の現状を各小学校で共有するとともに、人的・物的教育環境や教育課程の改善を図っていく上での有効な資料であります。また、福島県議会議員様や各市町村長様、教育委員会教育長様への「義務教育の充実・振興について」の要望活動の基礎資料にもなっております。ぜひ、次年度の学校経営、教育課程編成等に役立てていただければと思います。

令和3年12月には、第7次福島県総合教育計画が策定され、令和4年度より「学びの変革」を柱とした福島県の教育がスタートします。そのためには、教員が主体的に学び、やりがいを持って働くことができる環境を実現していくことが必要です。そして、この行財政部の調査結果をもとにした要望活動により、「学びの変革」が推進できる体制づくり(学校現場への人的配置等)がさらに構築されることが期待されます。

今後の調査は、3月に令和4年度「教職員人事の反省」が予定されています。人事異動は、学校にとって次年度の教育活動を左右するとともに、教職員の意欲を高めるとても大切なものです。そのためにも、各校より具体的な改善策や提案をいただければありがたいです。また、教育活動を推進していく中で、行財政上の観点から要望等がありましたら、担当までお知らせください。支会長様にご指導をいただき、改善を図っていきたく思いますので、よろしく願いいたします。

## 基本的な生活習慣の確立とメディアコントロール

東西しらかわ小学校長会生徒指導部長 東城 正充  
(矢吹町立三神小学校長)

『東日本大震災・原子力災害』及び『児童を取り巻く環境の変化』に係る生徒指導上の諸問題に関する調査にご協力いただきまして、誠にありがとうございました。今年度から、多忙化解消に鑑み、【調査C】「ネット・SNS利用の実態と校長としての取組」につきましては、隔年実施ということで、ローテーション表を作成し、実施させていただきました。その【調査C】の結果で、気になった項目を紹介します。

	令和元年度	令和2年度	令和3年度
ネット・SNSの利用状況(利用有)	70.8%	78.0%	82.6%
ネット・SNSの利用時間(平日2時間以上)	18.5%	23.2%	23.7%
ネット・SNSの利用時間(休日3時間以上)	18.4%	24.6%	26.3%
ネット依存と思われる状態になった	7.2%	10.0%	9.4%
生活が乱れ不登校になった	2.4%	3.7%	4.0%

この調査結果を見て分かるように、令和2年度に利用状況、利用時間等が大きく増加し、令和3年度も増加傾向が続いております。

先日、県小中学校長会生徒指導部(会)部長・副部長会に出席した折りに、福島県立医科大学、横山浩之教授の「学校におけるネット依存の予防と対応について」という講演を拝聴しました。

特に印象に残ったことが、3つありました。1つ目は、依存症の予防には、基本的な社会生活習慣を遅くても小学校高学年までに身につけること。2つ目は、早寝・早起き・朝ごはんの習慣化により、メディアコントロールにつなげること。3つ目は、睡眠時間をしっかり確保することです。

ネットやSNSの利用増加に伴い、生活習慣の乱れや依存症となる危険性が高まってきています。ですから、ネットやSNSの利用時間等について真剣に考えていく必要があります。そのヒントとなるのは、横山教授の講演にあった、基本的な生活習慣の確立です。

ネットやSNSの利用時間について、家庭の生活習慣の一部と捉え、家庭で過ごす時間を家族全体で見直し、子どもの発達段階に応じて睡眠時間をしっかりと確保できるよう話し合う。そのために、学校はどう関わればよいか、教職員や保護者、地域の方々を巻き込みながら考えていきたい。

## 「特別じゃない」横断的なコラボ

東西しらかわ小学校長会特別調査部長 永島 慶和  
(中島村立滑津小学校長)

特別調査部の主たる活動目的は、「校長としての職能を向上させ、各学校の円滑な運営に寄与する」とあります。そのために、今日的な教育課題や学校経営・運営に係る諸課題に視点を当てて、協議(または「アンケート調査」による意見の集約)や有識者招聘により、その改善策・対応策等について、各自が熟考する機会の提供に努めてまいりました。

部名称の文字面には「特別調査」とありますが、そこには、「特別な」意識が働いているわけではなく、校長職としての、自然な流れによる必然的な「学び」があったように感じています。

前提として、各校の状況や実態等に多少の差はあるものの、校長の抱く「もやもや感」があると思うのです。コロナ禍がどんよりと続く中で、任された学校の経営者は、学校教育の「質の保証」を維持しなければなりません。東西しらかわ小学校長会へ赴き、ある種、焦燥感に似た想いを持ち寄った各々が、情報交換をとおして、学校経営のヒントを得ることができればと願っていました。担当者ではありましたが、模索していた一個人として、諸先輩からの助言(時には、叱咤激励あり)はとてもありがたかったです。

冷静になって振り返ると、カチッとした研修会の枠組み外の「横のつながり」が貴重でした。開始前や休憩時のすきま時間や、閉会後の駐車場等での「雑談」が、後になって職能の「最強の武器」になったかもしれません(笑)

企画立案の際には、小学校長会長から指導・助言を受けて、随時、庶務や研修部と連携をしながら効率的な研修の設定に努めてまいりました。今年度は、県理事会の研修課題でもあった、個別最適な学びを目指す「GIGAスクール構想」と、早急な対応が求められる教育的課題である「働き方改革」について意見集約をしました。また、県の動向を踏まえた、講師招聘による講演会も実施することができました。

「横断的なコラボ」による恩恵を生み出す場になるよう、今年度の成果と課題を検証して、次年度につなげていきたいと考えています。